

開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館

〒231-0021 横浜市中区日本大通3 電話(045)201-2100

ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

Number

150

発行日／2021年(令和3)1月30日(土)

印刷／中川印刷株式会社



横浜市惨害全景(其貳) 西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板写真 1923(大正12)年9月 当館蔵

東日本大震災の発生から一〇年を迎えようとしています。二〇一一年(平成二三)年三月一日午後二時四六分、三陸沖の太平洋を震源とするマグニチュード九・〇の地震は、東北地方を中心に甚大な被害をもたらしました。特に津波が襲った太平洋の沿岸部は壊滅的な打撃を受け、人びとの住む街は廃墟となりました。

まさにそれと同じ状況が約一〇〇年前の横浜でも起こっていました。一九二三(大正一二)年九月一日午前一一時五八分、神奈川県を震源とするマグニチュード七・九の地震、関東大震災です。

情報技術が発達した今日、災害の情報はSNSなどを通じて瞬く間に世界へと広がっていきます。東日本大震災においても、発災後の悲惨な状況は、テレビカメラだけでなく、様々な媒体に記録され、インターネットを通じて拡散していきましました。こうした情報は、東日本大震災の惨状を後世に伝えていく上で重要な役割を果たしています。

しかし、インターネットはもちろん、テレビやラジオもなかった関東大震災当時、災害の情報を記録した

写真師たちの撮影した写真は、災害の記録を体系的に整理した「災害誌」だけでなく、新聞やグラフィ誌、さらに絵葉書などの形で現在に残っており、関東大震災を視覚的にとらえる貴重な資料となっています。これらを文字資料とあわせて分析することで、横浜を襲った地震の状況が浮かび上がってきます。

従来、関東大震災を撮影した横浜の写真師は、岡本三朗と前川謙三の二人が知られていました。そうしなか、かつて鎌倉市にあった西野写真館から関東大震災時の横浜を撮影した写真の原板(ガラス乾板)が発見されました。原板が写真館に残っていたことから、撮影者は同写真館の経営者だった西野芳之助だと考えられます。これによって来歴が判明する写真群が新たに一つ加わることにしました。

本展示では、旧西野写真館から当館が寄贈を受けたガラス乾板を中心に、写真師たちの撮影した被災地、震災時の横浜の姿にせまっています。

(吉田律人)

企画展

レンズ越しの被災地、横浜

—写真師たちの関東大震災—



焼け落ちた初代横浜駅の駅舎 上記写真の部分

横浜の様子をカメラに収め、各方面に発信していきました。

写真師たちの撮影した写真は、災害の記録を体系的に整理した「災害誌」だけでなく、新聞やグラフィ誌、さらに絵葉書などの形で現在に残っており、関東大震災を視覚的にとらえる貴重な資料となっています。これらを文字資料とあわせて分析することで、横浜を襲った地震の状況が浮かび上がってきます。

従来、関東大震災を撮影した横浜の写真師は、岡本三朗と前川謙三の二人が知られていました。そうしなか、かつて鎌倉市にあった西野写真館から関東大震災時の横浜を撮影した写真の原板(ガラス乾板)が発見されました。原板が写真館に残っていたことから、撮影者は同写真館の経営者だった西野芳之助だと考えられます。これによって来歴が判明する写真群が新たに一つ加わることにしました。

本展示では、旧西野写真館から当館が寄贈を受けたガラス乾板を中心に、写真師たちの撮影した被災地、震災時の横浜の姿にせまっています。

(吉田律人)

のは新聞社や通信社の職員、官庁の技術者、そして街中で写真館を営む写真師たちでした。彼らは被災しながらも焼け野原となった

発見！ 関東大震災の写真原板

関東大震災の被災地を捉えた写真はプリントや絵葉書、グラフ誌、写真集、さらに災害対応の情報を体系的に整理した「災害誌」など、様々な形で今日に残っている。これらは約一〇〇年前の状況を知る重要な手がかりとなるものの、伝播していく過程で加工が加えられ、事実を伝えていないものも多い。また、撮影者が特定できる写真も少なく、いつ、誰が、何のために撮影したのか判然とするものはほとんどない。

分析対象となる資料の性格を検証していく上で、これらは極めて重要な情報だが、時間の経過とともに、そこへアプローチ方法が失われていったため、これまでの研究では等閑に付される傾向にあった。

そうしたなか、今回の企画展示で紹介する「西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板写真」は、いくつかの空白部分を埋める重要な歴史資料だと考えられる。そこで本稿では、これまでの研究成果を踏まえつつ、同資料の発見経緯から分析の過程、そして資料の持つ歴史的な意義等について解説していきたい。

岡本三朗と前川謙三

関東大震災を撮影した横浜の写真師については、これまで岡本三朗（一八九七年—一九九〇年、「三朗」は戸籍名で、通常は「三郎」を使用）と前川謙三（一八七三年—一九四六年）の二人が知られてきた。二〇一三（平成二五）年に開催した横浜都

市発展記念館・横浜開港資料館・横浜市史資料室の連携展示「関東大震災と横浜」では、岡本と前川の撮影した写真について紹介した。

岡本は横浜を代表する写真師であつた玉村康三郎の弟子で、震災当時は常盤町二丁目写真館を営んでいた。岡本は震災直後から市内の様子をカメラに収め、地震の惨状を記録していった。常盤町から横浜市役所を撮影した写真など、その一部は本誌第一二一号や第一四七号で紹介した通りである。特徴的なのは、岡本が機動的に撮影を行っている点で、煙が燻ぶる市街地など、臨場感ある写真を現在に残している。

一方、前川は帝室技芸員であつた丸木利陽の高弟で、震災当時は弁天通三丁目において写真館を営んでいた。地震によって写真館を失ったものの、前川は本牧に逃れていた。小西写真専門学校の教授であつた秋山轍輔は、「前川謙三氏は一家無事に本牧に避難されたことは、全滅の横浜では幸福なことであると御喜びを申す外はないのである」と、『写真月報』第二八巻第一一〇号（一九二三年一月）に記している。

その後、横浜市から要請を受けた前川は、門弟たちを率いて市内の撮影を行った。撮影の時期は市街地の復旧状況や港内に停泊する軍艦から一九二三（大正一二）年の九月中旬頃と考えられ、ガラス乾板を含め、約一八〇枚の写真が残っている（資料群の詳細は横浜市史資料室編・発



図Ⅰ 西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板写真 当館蔵

行『報告書 横浜・関東大震災の記憶』二〇一〇年を参照）。

両者の写真を比べると、「動」の岡本、「静」の前川と性格を分けることができる。この違いは一九二四年九月二八日に行われた美澤進（横浜商業学校初代校長）の葬儀でも見られる。当日の写真記録を担当した横浜貿易新報社の山本和久三記者は、「写真師は前川君と岡本君であつたが前者は斯業の老大家であるから特に大體の方針を示して其自由裁量に任せ、後者は予と心易い間柄でもあり且つ平生所謂新聞写真に造詣の深い



図Ⅱ ガラス乾板に貼られた薄紙部分

のを利用し更に軽快敏捷なるカメラマンとしての彼の特性を極端に発揮せしむべく、予も共に広き運動場を馳駆しつ、多数の雑観を収めた」としており、二人の写真師の性格を端的に表している（『横浜貿易新報』一九二四年一〇月四日）。

両者の写真とも幅広く活用され、公的な記録である渡邊正男編『横浜市復興会誌』（横浜市復興会、一九二七年）や横浜市編・発行『横浜復興誌』（一九三二年）に収められているほか、一九二八（昭和三）年八月に開館した横浜市震災記念館でも展示されていた。また、プリントや絵葉書の形で多く残っており、横浜の関東大震災を知る基礎的な資料となっている。

新資料との邂逅

岡本三朗や前川謙三の写真が収められた災害誌を見ると、それらのほかに、撮影者のわからない複数の写真群を確認することができると。そのうちの一つに、写真の中に撮影場所等の説明が和文と英文で入ったものがある。これは筆者が横浜部分を執筆した北原糸子編『写真集 関東大震災』（吉川弘文館、二〇一〇年）でも一部を紹介している（画像は横浜



図Ⅲ 横浜市元町河岸惨害 1923（大正12）年9月 当館蔵



図Ⅳ 停泊中の戦艦「伊勢」

が貼り付けられ、それをプリントすると、画像と一緒に仕組まれた（図Ⅱ）。これによつ

市中央図書館蔵『横浜大正地震写真帖』所収のプリントを使用）。この時以来、技術的に、どのようにしたら写真の中に説明を入れることができるのか、ずっと疑問に思っていた。それから一〇年近くを経て、奇跡的にその答えに接する機会を得た。二〇一八（平成三〇）年秋、鎌倉市在住の三浦君代氏から当館に、自宅から関東大震災時の横浜を撮影したガラス乾板が出てきた、という旨のご連絡をいただいた。震災関係のガラス乾板は、プリントを接写したもの、つまり、複製版を確認したことがあるので、当初、筆者は同様の乾板だと考えていた。しかし、三浦氏のご自宅を訪問すると、予想は大きく外れることになった。

緩衝材とともに、箱に入ったガラス乾板を見せていただくと、衝撃からすぐに鳥肌が立った。驚くことに、ガラス乾板は説明入り写真の原板だったのである（図Ⅰ）。そして問題の説明部分は、文字を書いた薄紙

で疑問が解決することになった。

ガラス乾板の概要

西野写真館旧蔵ガラス乾板のサイズは縦一〇・五センチ、横一六センチで、枚数は全部で二八枚ある。部分的に欠けているものや、薄紙の外れているものがあるものの、保存状態は極めて良好であった。この来歴を三浦君代氏に伺ったところ、撮影者のヒントを得ることができた。

それに依れば、三浦氏の出身は鶴岡八幡宮前にあった西野写真館（鎌倉市雪ノ下）で、同写真館は横浜で写真館を営んでいた西野芳之助が大正期に開業したものであった。一九一三（大正二）年段階の「横浜写真業組合名簿」（岡太郎編『神奈川県案内誌』勸業協会所収）には、日ノ出町一丁目在住の西野の名前が確認でき、伝承を裏付けている。

原板が西野写真館に伝わっていたことから、撮影者は西野芳之助だったと推察できる。おそらく、西野は状況が落ち着いた時期に古巣の横浜に赴き、被災地の様子を撮影したと考えられる。また、和文と英文の解説を加えているので、国内外を問わず、被災地の状況を広く発信することも考えていたのだろう。

この後、三浦氏のご厚意でガラス乾板を当館に寄贈していただくことになり、プリントの作成と同時に、撮影場所や時期の特定など、分析作業を進めた。その結果、それらの大枠について掴むことができた。

最初に撮影場所だが、これは解説があることから、容易に場所を特定することができた。建物の残骸と瓦礫のみで、目標物が少ない山下町についても、岡本三朗や前川謙三の写真と比較することで、場所の特定が可能となった。特徴的なのは、被害を受けた建物だけでなく、道を歩く人びとを捉えている点で、被災者や復旧に携わる人の様子がわかる。

続いて撮影時期は横浜港に停泊する軍艦や社会基盤の復旧状況から窺い知ることができる。例えば、元町から堀川の河口部を撮影した図Ⅲの写真には、横浜港に停泊する戦艦「伊勢」が確認できる（図Ⅳ）。同艦の入港期間は九月九日から三〇日までなので、この写真はその時期に撮影されたと考えられる。

さらに亀之橋を撮影した別の写真から撮影時期を絞ることができた。亀之橋は九月一四日から小倉駐屯の工兵第一二大隊が復旧作業に着手し、二一日に完成するが、写真の橋梁は明らかにそれ以前の状態である。つまり、図Ⅲの写真と合わせる、と、撮影時期は地震発生から二週間が経過しない九月九日から一三日頃だったと推定できるのである。

原板であるため、西野の写真は非常に鮮明で、被写体の細部までしっかりわかる。今後、岡本や前川の写真とともに、関東大震災研究の基礎資料の一つとして、幅広く活用されていくだろう。

（吉田律人）

萩原連之助の稽古記録と入門帳

江戸時代、剣術は武士だけのものではなかった。百姓・町人といった庶民の間にも剣術は広く普及していた（平川新『日本の歴史十二 開国への道』小学館、二〇〇八年）。庶民への剣術普及を担った人物は全国各地に数多存在する。

当館では萩原茂家文書を複製本にて公開しているが、その中には相模国鎌倉郡平戸村（現戸塚区）の在村剣術家・萩原連之助行篤の稽古記録や入門帳が含まれている。

連之助の稽古記録と入門帳については渡辺一郎『幕末関東剣術英名録の研究』（渡辺書店、一九六七年）の中で分析されているが、稽古人・入門者の数を再集計したところ異同があったため、今回改めて集計結果を示すことにした。

連之助は文政一〇年（一八二七）七月八日、江戸湯島の杉浦邸に生まれた。萩原家は旗本杉浦家の代官を務める家柄であった。天保一二年（一八四一）、連之助は信州上田藩士早田真太郎から直心影流を学び、長沼庄兵衛（直心影流）・団野源之進（同）・庄司弁吉（北辰一刀流）・伊庭軍兵衛（心形刀流）・桃井春蔵（鏡新明智流）らの道場にも通って剣技を磨いた。弘化四年（一八四七）平戸村に剣術道場を構え、時に諸国を遊歴して鍛錬に励んだ。その後、近習格の代官見習、近習、支配役を歴任し、明治以降は戸長・区長・地租改正総代人・学区取締・医務取締、神奈川県警の巡査警剣事務掛を務めるな

ど、変動する時代の中で剣術に出精しながら地方行政を担い、明治三七年（一九〇四）二月一二日にその生涯を閉じた。連之助の詳しい履歴については、西川武臣『萩原連之助の記録』（『開港のひろば』第二十六号、一九八九年）を参照されたい。

各地の剣術家たちとの交流を通じて錬磨された剣技はいかにして横浜周辺の村々に伝わっていったのだろうか。稽古記録と入門帳を手がかりに読み取ってみたい。

「剣客名」の中の剣士たち

連之助の稽古記録には「剣客名」（No.8）という表題が付されている。稽古のために萩原道場を訪れた剣術家たちの名簿であり、嘉永五年（一八五二）から慶応三年（一八六七）まで、一九六人を確認できる。そこには「神道無念流 斎藤弥九郎門人 上田藩 篠原国太郎 寅八月三日試合」という具合に、稽古の年月日、稽古相手の名前はもとより、剣術流派・師匠名・出身・肩書などが記されている。

そうした情報を集計し、剣術家数の変化を示すと表1のようになる。二人以下の流派は「その他」、流派名の記載がない者は「無記載」とした。合計数が一九六人ではなく、二〇〇人となっているのは、同一人物が複数回稽古していたり、二流派を兼業している者がいるためである。この表を見ると、安政二年から同六年までが萩原道場における出稽古のピークであったことがわかる。

クであったことがわかる。

最も多いのは連之助自身の流派である直新影流で四八人と突出している。一七、一八世紀にかけて成立した直新影流は竹刀での打込稽古を広めた一流派といわれ、幕末期には幕府の総合的な武芸稽古機関である講武所の頭取並を務めた男谷精一郎らを輩出した。「剣客名」には男谷の門人四人が記載されている。他にも連之助が道場に通った長沼庄兵衛や団野源之進の門人の名前が見える。修業時代の交流が道場主となって以後も継続していたのである。

直新影流に次ぐのが北辰一刀流二人、神道無念流二人である。北辰一刀流は玄武館、神道無念流は練兵館と呼ばれる道場を江戸に開き、いずれも多くの門人を集めて隆盛を極めていた。諸流の門人たちは江戸にとどまることなく、近郊農村の腕ある剣術家のもとをたびたび訪れては稽古に励んでいたのである。北辰一刀流では開祖千葉周作門人の香取熊五郎が嘉永七年（安政元・一八五四）九月一八日、同じく真田範之輔が安政三年四月一〇日に稽古を行っている。神道無念流では斎藤弥九郎の門人九人を確認できる。

武蔵国・相模国に多くの門人を有していた天然理心流については、合計六人の来訪を確認できる。安政五年八月に宗家の近藤勇が自ら萩原道場を訪れているが、この時は七月六日に一三代将軍徳川家定が死去した直後（御停止中）であり、弔意を

表するため稽古は行われなかった。

萩原道場での稽古について注目したいのは、様々な藩士との関わりである。門人を萩原道場に派遣した剣術師範のうち一八人、稽古相手のうち三八人が藩士である。藩名を挙げると、仙台・新庄・村上・黒川・高田・水戸・麻生・大田原・烏山・高崎・川越・小田原・上田・大垣・田中・掛川・刈谷・桑名・亀山・水口・膳所・出石・丹南・姫路・龍野・鴨方・長州・徳島・久留米・中津・佐賀・佐伯・延岡・佐土原藩であり、実に幅広い。全国各地の藩士が萩原道場に通うようになった背景は判然としないが、剣術道場や諸藩の武家屋敷が密集する江戸から無理なく通える範囲内、東海道保土ヶ谷宿に接するという平戸村の地理的利便性が関係していたのだろう。

ただし、長州藩の場合は他と事情が異なり、異国船来航に伴う相州警衛と密接に関わっていた。長州藩は嘉永六年から安政五年の間、幕府の命で相模国に預所を置き、陣屋・台場の警衛を担当した（相州警衛）。「剣客名」によると、安政三年に小野派一刀流の山田清太良、神道無念流の岡与市・芥川三九郎らの名がある。また、長州藩士堀重蔵が鏡新明智流の木藤和平次の門人として安政四年から同六年まで毎年萩原道場に出稽古を行っている。長州藩による相州警衛の拠点となったのが三浦郡上宮田村（現三浦市）の陣屋であるが、連之助は安政五年正月に同陣屋

表2 萩原連之助門人数の変化

年 代	人数	年 代	人数
弘化3年(1846)	12	安政4年(1857)	6
弘化4年(1847)	1	安政5年(1858)	15
嘉永1年(1848)	7	安政6年(1859)	4
嘉永2年(1849)	0	万延1年(1860)	3
嘉永3年(1850)	3	文久1年(1861)	7
嘉永4年(1851)	15	文久2年(1862)	6
嘉永5年(1852)	15	文久3年(1863)	1
嘉永6年(1853)	18	元治1年(1864)	19
安政1年(1854)	14	慶応1年(1865)	18
安政2年(1855)	6	慶応2年(1866)	26
安政3年(1856)	27	慶応3年(1867)	0

・萩原茂家文書No.4・10・12「兵法起証文(入門帳)」より作成。



写真 萩原道場の風景 萩原茂家文書

の入門者を得ている。この頃には直新影流を中心とする剣術家たちが萩原道場を訪れるようになっており、次第に活況を呈していった様子が窺える。

ただ惜しいことに「兵法起証文」には入門者の出自などが記されていないのか、どこの誰なのか

表1 萩原道場に通った稽古相手の流派と人数

流派	嘉永		安政							万延	文久				元治	慶応			合計	
	5	6	1	2	3	4	5	6	1	1	2	3	1	1	2	3	1	2		3
直心影流	7	2	5	2	9	8	3	3	3			2						3	1	48
北辰一刀流	1					3	3	3	4			1	2						4	22
神道無念流		1	1	4	4	2	1	3	2			1			1				1	21
一刀流	1	1	1	4		1	1											1	1	11
小野派一刀流	3	1	1	1	2			1		1										11
鏡新明智流	2				1	1	3	3			1									11
田宮流		1	1	1		1	2				1									7
天然理心流	1			2			1										2			6
心形刀流	1			1		1	2	1												6
柳剛流				2		1	1					1						1		6
新陰流		1	1			1	2													5
甲源一刀流			1	1	1	1														4
貫心流												3						1		4
天真一刀流							1		2											3
八幡一刀流												3								3
その他		1	1		2	1	2	4			1	1					1	1		15
無記載			2	2	2	4	1	1		1	1	1			2					17
合計	16	8	15	20	24	26	23	20	8	4	11	5	0	6	7	7				200

・萩原茂家文書No.8「剣客名」より作成。

「兵法起証文」にみる入門者

で剣術の試合を行い、有事に備えるため近郊農村の子弟に剣術を教授するように命じられている(前掲『開港のひろば』第二六号)。連之助には長州藩の相州警衛の末端を担う役割が期待されていたのである。

次に入門帳を分析してみよう。萩原茂家文書には入門者の名簿である「兵法起証文」六点が残り、弘化三年(一八四六)から昭和四年(一九二九)に至る入門者を確認できる。ここでは幕末期の入門者を把握できる三点(No.四・一〇・一二)を分析し、年ごとの変化を表2に示した。連之助が道場を構えたのは弘化四年だが、その前年から入門者がいたことになり、経営の土台を築いた上での道場開設だったと考えられる。その後、入門者数は停滞するが、嘉永四年から安政元年にかけては毎年一〇人以上、同三年には最も多い二七人の入門者を得ている。

この頃には直新影流を中心とする剣術家たちが萩原道場を訪れるようになっており、次第に活況を呈していった様子が窺える。

庶民剣士誕生の背景

文化二年(一八〇五)五月、幕府は身分を忘れて「気がさ」になるとして百姓の武芸稽古を取り締まっていた(『御触書天保集成』下)。それでも在村の武芸稽古は止まるところを知らず、各地で庶民剣士が誕生していったのであった。

万延二年(文久元・一八六一)二月、幕府は浪人・無宿・「不法候者」の取締を強化するように命じた(『幕末御触書集成』第五巻)。この触書には「向後右体の者(浪人・無宿・不法者)共立廻り候はば、聊か用捨無く捕り押さえ置き、早々申し聞けらるべく候、尤も手に余り候義も候はば打ち捨て候とも苦しからず候」括弧内は筆者。原文は書き下し文に改めた」とある。浪人たちが立ち回った場合、それを取り押さえるのは村々の役目であり、手に余った場合は「打ち捨て」、つまり殺害すら容認している。実戦慣れした浪士を捕縛し、時に「打ち捨て」るだけの技量が村々に備わっていることを前提とした内容になっている。

萩原道場を核に各地の諸流派剣士との交流で磨かれた剣術が開港地・東海道周辺村々に還元されていく。萩原茂家文書が伝える「剣客名」と「兵法起証文」からは、そうした一連の流れを読み取ることができる。

(神谷大介)

明治・大正期の農村青年 —小山と宮田吉五郎—



写真1 宮田吉五郎
宮田吉秀家文書

日露戦争期における増税に加え兵力動員による労働力不足により、疲弊した農村を立て直すために、日露戦後に内務・文部・農商務省を中心に地方改良運動が展開された。その期待を担ったのは、農村の青年たちであった。宮田吉五郎(写真1)も、その一人である。この稿では地域の青年会での吉五郎の活動について紹介し、明治・大正期の「農村青年」について考えてみたい。

吉五郎は一八九〇年に小山(現在、緑区小山町)に生まれ、村立高等中里小学校を卒業した。農業に従事し、一九二二年に県から委嘱された蚕桑指導員として、養蚕家に指導を行ない、村の育蚕技術の改善をはかった。

小山は、一八八九(明治二二)年から一九三九(昭和一四)年まで、神奈川県都筑郡中里村に「三あつた」字の一つである。多摩丘陵の東縁部、鶴見川とその支流である恩田川との間に位置した。一九〇七年の戸数は三八戸で、農業を営む家が多く、明治二〇年代から養蚕も行なわれた。

宮田家は小山町の旧家で、宝暦八(一七五八)年正月の質地証文から昭和にかけて、およそ三〇〇点の文

書類を所蔵した。これらの資料は、吉五郎の孫にあたる宮田吉秀氏のご厚意により、当館へ寄贈され複製を公開することになった。

農事品評会の賞状

宮田家文書に、吉五郎が都筑郡農会などから贈られた、農事品評会の賞状が見られる(図1)。

都筑郡農会は一八九九年六月農会の成立後、一九〇〇年六月に設立認可を受け、翌年二月に発会式を行った。農事調査・農業教育・農事改善・農家の副業・農事組合・村農会の督励などの改良発達を図ることを目的とした。郡農会は、中里村で行われたいくつかの団体の農事品評会に、賞状を贈っていた。

図1を見ると、吉五郎は、一九一九年に行なわれた中里村農会第一回農産物品評会では、米二等賞・落花生

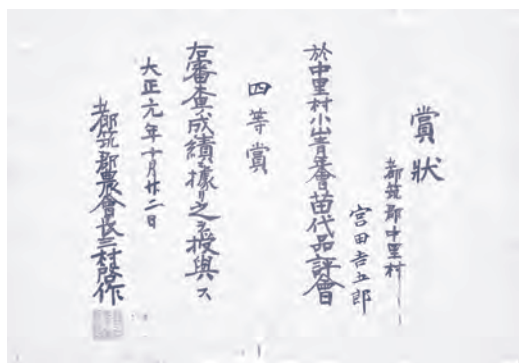


写真2 中里村小山青年会苗代品評会賞状 宮田吉秀家文書

生四等賞・繭二等賞であり、同時期に複数の種類の農産物を生産していた。また、一九一九年に行なわれた養蚕組合連合会第一回繭品評会でも一等賞を受賞しており、その後も繭で受賞するなど、養蚕に力を入れていたこともわかる。

賞状の品評会名に、「中村小学校同志会」、「中里村有終会」、「中里村小山青年会」(写真2)が開催したものが見られる。いずれも、中里村の青年会が行なった農事品評会であった。前の二つは小学校同窓生の組織、もう一つは「字」単位の青年会である。

青年会について

地方改良運動を契機として、各地に行政府を単位とする青年会(団)が設立されるようになった。内務省地方局長や文部省普通学務局長は、一九〇五(明治三八)年に、相次いで青年団体に関する通達を出した。一九〇八年には「戊申詔書」が出され、町村を単位とした青年団体への改善が指導された。青年の風紀の改善、知徳の啓発、体位の向上などに つとめ、公共事業の補助機関として活動させようとしたのである。

中里村にも複数の青年会が存在し

番号	年代	品評会名	成績	発行
1	1912年3月	中村小学校同志会第1回麦作立毛品評会	1等賞	都筑郡農会長
2	1912年10月	中里村小山青年会苗代品評会	4等賞	都筑郡農会長
3	1912年11月	中里村有終会第1回麦作立毛品評会	3等賞	都筑郡農会長
4	1919年3月	中里村農会第1回農産物品評会	米2等賞/落花生4等賞/繭2等賞	都筑郡農会長
5	1919年3月	中里村農会第1回稲作立毛品評会	関取3等賞	都筑郡農会長
6	1919年3月	養蚕組合連合会第1回繭品評会	1等賞	都筑郡中里村農会長
7	1919年10月	第2回都筑郡繭品評会	春繭3等賞	都筑郡繭品評会長
8	1921年12月	都筑郡農会第11回農産物品評会	繭2等賞	都筑郡農会長
9	1924年11月	中里村農会第3回農産物品評会	小麦3等賞	都筑郡農会長
10	1933年11月	組合主催第1回春蚕繭質改良品評会	4等賞	都筑郡養蚕業組合長
11	1935年4月	中里村農会第3回水稻品評会	4等賞	都筑郡農会長
12	1936年12月	都筑郡農会主催第1回農作物品評会	春繭3等賞	都筑郡農会長
13	1937年2月	第1回麦作立毛品評会	3等賞	都筑郡中里村小山農事実行組合長
14	1940年11月	大日本蚕糸会神奈川支会主催紀元二千六百年記念蚕業共進会	繭4等賞	蚕業共進会会長

図1 宮田吉五郎の農産物品評会賞状

た。吉五郎は、出身校である高等中里小学校の同窓生を組織した有終会と、「字」の小山青年会に所属した。

有終会と吉五郎

有終会は、会員相互の交誼を厚くし、智徳を修め、協同一致の精神を養うことを目的に、一八九七年に高等中里小学校卒業生で組織された。小学校の同窓会であるため会員は青年男女で、一九一三年に二五六人、一九一四年に二七六人と、中里村では最も会員数の多い青年会であった。また、事業には講話会・談話会

があげられているが、村で唯一『有終の友』という文芸を主とする雑誌を発行していた。

同誌は一九〇九年に創刊し、以後一九一三年五月(第一六号)まで発行された。編集主任を廣田秀風(長重)が担当した。その弟であり作家で、後に横浜貿易新報社の記者となった廣田花崖(鉄五郎)が、作品を寄せるとともに、募集原稿の選者になっていた。雑報欄では、有終会及び他地域の青年会の事業が紹介されている。吉五郎は文章を投稿し、編集にも携わっていた。

同会は小学校の同窓生に、さらなる教育の機会を与える役割を期待されていたが、中里村青年会が結成されるのに伴い、活動を終えたよう



写真3 中里村青年会記念写真 宮田吉秀家文書

ある。

小山青年会と吉五郎

小山青年会は、一九〇四(明治三十七)年二月に創立し、一九四一(昭和一六)年四月二七日に解散した。字内の一五才から四一才までの男子

を会員とし、公共事業、兵士の送迎、祭典及び天災等の際互に扶助し、労働事は総て誠実に尽力し、時局に対し共に事業の発展進歩を計ることを目的とした。また、勤儉貯蓄を旨とし、互に交誼を厚くし、喜憂を共にするとした。年一回開催される総会では、「戊申詔書」が読まれた。

当館が複製を公開している「小山青年会関係資料」(落合康夫氏所蔵)に、二冊の会誌が含まれている。役員が記録したもので、同青年会が五周年を迎えた一九一〇年三月から一九四一年まで、具体的な活動内容がわかる資料である。このなかから、同会の事業を紹介したい。

吉五郎は、一九〇五年には小山青年会に加わった。その後、一九二二年度に幹事となり、一九二三年度まで評議員など役員を務めた。なかでも一九一五から一九一七年度までは、会長であった。役員であった時期に行なった事業には、次のようなものがある。

①視察と講習会及び旅行

一九一四年二月には、中村小学校同志会と合同で、文部省から表彰された高座郡溝村青年会を視察した。また、同年三月一二日から一五日

と、一七日に、神奈川県地方改良会講習会に他の役員と共に参加した。

同年四月一〇日・一一日には、都筑郡青年会連合で、東京の上野で行なわれた大正博覧会参観を行ない、一六名が参加した。

一九一六年四月一七日・一八日には大山・江の島・鎌倉へ団体旅行を企画し、一一名が参加した。

②『横浜貿易新報』主催青年大会
一九一五年五月五日に『横浜貿易新報』主催青年大会が行なわれた。神奈川県内各地の青年会代表者が一堂に会した大規模な大会であったが、小山青年会からも、吉五郎を含む三名が参加した。

③御大典記念事業
一九一五年大正天皇の御大典事業として、会員に桐苗を一本ずつ配布した。翌年には、字内の工事に使用する土取場として使用していた官有地を、郡役所から許可を得て借入れ、記念植樹を行なった。

④試作桑園の経営
一九一六年に借用した官有地で、桑園の経営を始めた。以後、桑葉施肥、五月と八月に桑葉の売却についての記事が見られる。

なお、後年吉五郎は青年会の顧問を務め、一九二五年から一九四一年まで、所有する畑地を青年会に貸与した。

一九一七年四月に中里村青年会が発足し、小山青年会はその支部となった。この頃、都筑郡連合青年会などの運動会が行なわれたが、支部

から村青年会に代表を派遣している。写真3は、そのような運動会の記念に撮影されたのだろう。

字の男子を会員とする小山青年会では、農業分野では、稲種子の塩水選を実施し、農作物品評会、試験桑園の経営等を行なった。公共的な事業では、道路工事の請負や道路標柱の設置、従軍者及び帰還者の送迎、留守宅の農作業等の手伝い、という役割を担っていた。また、中里村青年会が創立しその支部となつてからは、字での公共事業と同時に、郡や村の青年会(団)に組み入れられて事業に動員されるようになったのである。

おわりに

資料からは吉五郎と同様に、小山の複数の「農村青年」たちが、中里村青年会に統一されるまで、有終会と小山青年会の両方に所属していたことがわかる。彼らは日々の農作業のかたわら、前者では農業技術などの学習とともに文学を楽しみ、後者では地域及び村の公共事業などの役割を担う日常を送っていたのである。

吉五郎は、一九三九年四月一日、第六次市域拡張により中里村が横浜市に併合される際に、当時病床にあった村長に代わって助役として引き継ぎ事務を行なった。

資料をご寄贈いただいた宮田吉秀氏に感謝いたします。

(上田由美)

明治の郷土開発史

このたび当館では内田憲一家文書の寄贈を受けた。同家文書は六点のみだが、明治の土地開発によって変貌していく農村の様子を現在に伝える貴重な資料群である。

江戸時代、内田家は相模国鎌倉郡長沼村（のち豊田村）現在の横浜市栄区長沼町の村役人を務めていた。長沼村は西境に柏尾川が流れ、東海道戸塚宿から鎌倉へと至る道（鎌倉往還）現在の県道二〇三号 大船停車場矢部線が貫通する交通・物流の要衝であった。

横浜が開港すると、馬車・人力車などが普及し、鎌倉往還沿いでは險路を整備する必要性が高まっていた。一八八三（明治一六）年十一月、神奈川県は内務省に対し、長沼村と飯島村の間を通る蛤坂の道路開削を求め、伺書を提出している。

それによると「従来險重ニシテ殊ニ屈曲多ク人車通行ノ不便少カラサルヨリ今般村民共奮励寄附金ヲ醸出シ」（「神奈川県史料」第二巻政治部二）とある。この寄付に応じた村民の一人が

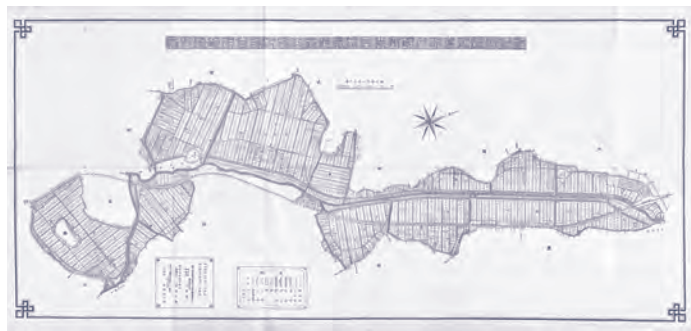


図 神奈川縣鎌倉郡戸塚町豊田村長尾村本郷村連合耕地整理図
1910（明治43）年5月7日 当館蔵（内田憲一家文書）

内田定吉であった。内田憲一家文書には神奈川県令沖守固が一八八四（明治一七）年六月に出した定吉宛感謝状二通が残る。明治の道路整備は地域住民の協力なくしては成り立たない事業であった。

そうした鎌倉往還に沿って流れる柏尾川はたびたび氾濫し、流域の耕地に被害を与えていた。一九〇五（明治三八）年になると柏尾川流域の町村が河川改修を目的とする耕地整理を計画しはじめ、翌年には農商務大臣に認可された。長沼村は一八八九（明治二二）年四月に上倉田・下倉田・飯島の各村と合併し、「豊田村」になっていた。豊田村ははじめ柏尾川沿いの町村は一致協力して改修工事に取り組み、一九一〇（明治四三）年の工事完了時には堤に山桜を植え、戸塚町で竣工式を挙行了。内田憲一家文書に伝わる同年五月七日作成の「神奈川縣鎌倉郡戸塚町豊田村長尾村本郷村連合耕地整理図」からは、柏尾川や鎌倉往還、さらには東海道本線に沿った当時の耕地の概況を確認できる。

二〇二一年三月四日まで開催するミニ展示では、明治時代における鎌倉往還・柏尾川の開発について、内田憲一家文書を通じて紹介する。（神谷大介）

資料館 だより

▼企画展

- (1) レンズ越しの被災地、横浜
一写真師たちの関東大震災—
会期：2021年1月30日（土）～4月18日（日）
- (2) 江戸時代の日本とイギリス（仮称）
会期：2021年4月24日（土）

～7月11日（日）（予定）

日本とイギリスの交流は17世紀初めにはじまります。「鎖国」によって直接の交渉は一時途絶えますが、19世紀のアジア進出とともに、イギリスは再び日本とのつながりを深めていきます。当館の所蔵する歴史資料から開港以前の両国の関係を考えます。

▼関連講座「関東大震災と災害写真—被災地・横浜の風景—」

日時：2021年3月6日（土） 13:30～15:00
会場：横浜開港資料館 講堂
定員：40人 参加費：500円 ＊事前予約制

▼展示図録

横浜開港資料館編『レンズ越しの被災地、横浜—西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板写真—』の販売

A4判、48頁、1,200円＋税
西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板写真の詳細を解説した写真集。写真師が捉えた被災地を全28枚の写真で追いかけて。横浜市街を流れる河川の状況や、瓦礫の山となった山下町、外壁を残して焼け落ちた建造物群、そして倒壊した港湾施設など、約100年前の地震の惨状が浮かび上がってきます。

▼濱ともデーについて

2021年3月31日までの毎月第2水曜日に濱ともデーを開催します。
この日は、横浜市内在住65歳以上の方限定で、100円の入館料が無料となります。
＊ご入館の際に「濱ともカード」をご提示ください。

▼寄贈資料

- ・堀正義旧蔵文書 180件（齋藤雄治氏）
- ・「御開港横浜之全図」 1件1点（亀田淳氏）
- ・関東大震災後他の郵便物 21点（本池悟氏）
- ・西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板 28点（三浦君代氏）
- ・内田憲一家文書 6点（内田憲一氏）

▼閲覧室での資料閲覧利用について

閲覧室のご利用は、事前予約制（先着順）です。閲覧希望日前日の正午までに、電話で予約してください。予約なしでの入室はできません。
＊詳細は、当館ホームページでご確認いただくか、電話でお問い合わせください。
開室時間 10:00～12:00、13:30～15:30
休 室 日 月曜日・火曜日（祝日の場合は翌日）、資料整理日、年末年始など

電話番号 045-201-2150

電話受付時間（開室日のみ）

10:00～12:00、13:00～16:00

▼Twitterはじめました

展示や所蔵資料のほか、開港資料館の「今」の情報をお届けします。

Twitter @yoko_archives

休館日・休室日のお知らせ

（1/30～4/18）

展示設営及び資料整理のため、以下の日はお休みさせていただきます。なお、毎週月曜日は通常の休館日となり、閲覧室は毎週月曜日・火曜日ともに休室いたします。
＊2/17（水）～2/19（金）は資料整理週間のため、閲覧室は休室いたします。
＊2/23（火・祝）は閲覧室を開室いたします。

閲覧室	2/17（水）～2/19（金）、2/24（水）、3/31（水）
-----	---------------------------------

- ＊ご入館の際には、オンラインによる事前予約（日時指定）をお願いいたします。
- ＊今後の状況により、開館日や開催内容等を変更する場合がございます。最新情報は、当館ホームページ（<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>）でご確認ください。